

編集人:ぶくぶくの会 〒564-0025吹田市南高浜町1-17-2A(総務)
TEL 06-6317-5598,FAX 06-6317-0936 Mail:so-mu@puku-2.com URL:www.puku-2.com
代表:馬垣安芳 編集長:上田かおり 1部200円
年間購読料:個人会員2000円 広報会員(3部)5000円
法人会員1口(5部)10000円 賛助会員(1部)10000円
振替口座00940-0-161341
「まねき猫通信」

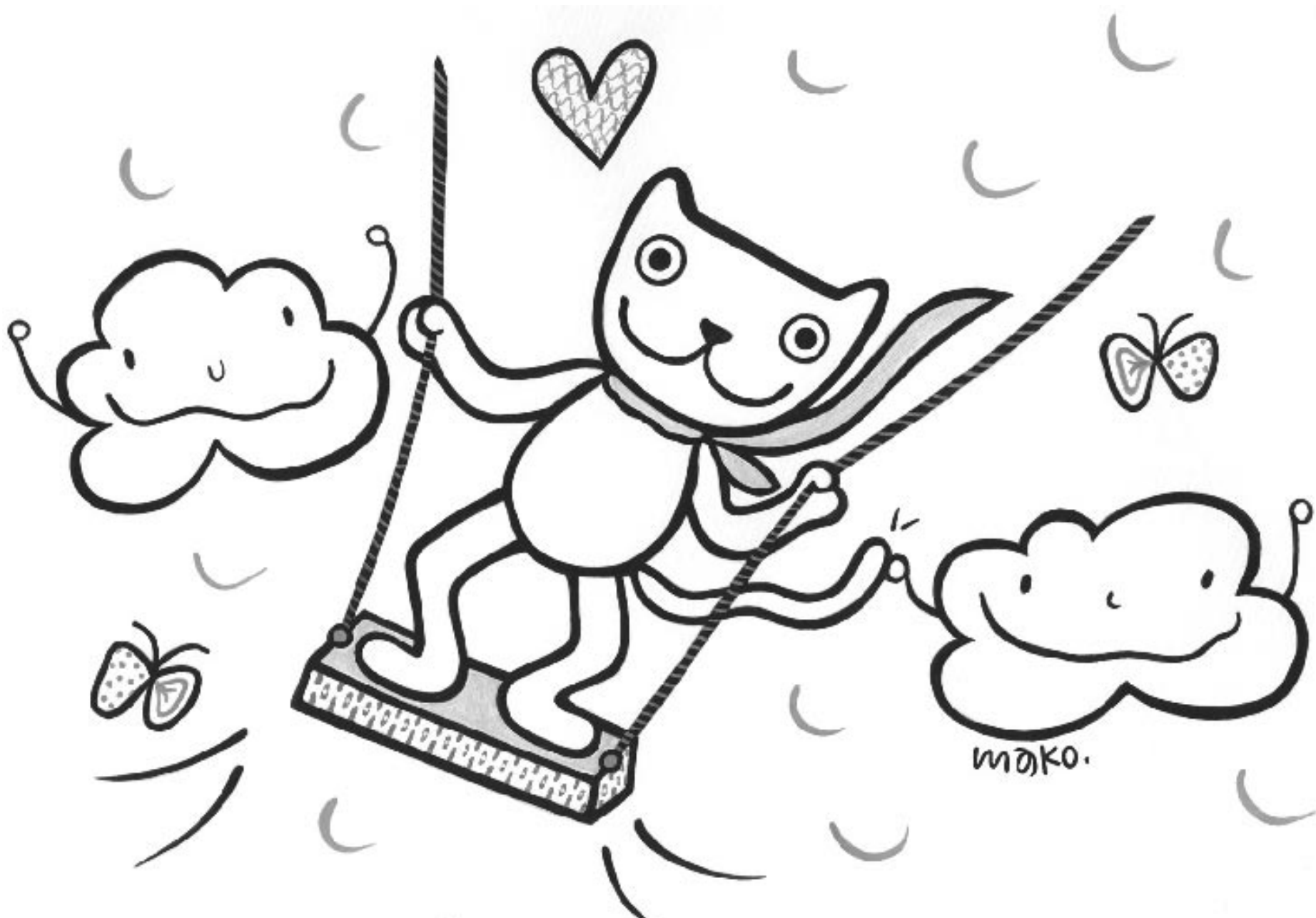


もくじ

特集:復興計画に障がい者の視点を-みちのくTRY 2
当事者エッセイ:1本のイタリア映画-轟広志 4
政治・経済批判が弱い日本のマスコミ-石塚直人 5
「逃げ遅れる人々」映画上映とお話 3/30 6

題字:
塩澤 文男
(しおざわ・ふみお)

一九八四年八月二〇日第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行



クレッシエンド

絵:まこ なまこ

トリの眼・ムシの目・ニャンコの目

先月に引き続き「雪」に拘ってみま
す。雪という漢字は「雨」に「彗」を
組み合わせた会意文字で「万物を掃
き清める、すすぐ、そそぐ」の意味が
あります。一面銀世界の光景を見て、
古人は浄化(カタルシス)を連想した
のでしようか。はたまた、豪雪の厳し
さに接して、人智を越えた自然に
対する畏敬と畏怖の念を抱いたの
かもしれないですね。韓国語で雪は
「芽」も又んで、同音異義語です。
雪も瞳も芽も澱んではないし、
汚濁・汚辱のイメージからはほ
ど遠いという共通点があるような
気がします。◀「雪がとけると何に
なる?」「この間に「水」と答えた
あなたは、理性的な人です。「春」
と答えるあなたは、とても詩的で
すね。そして、「放射能」と答え
るであろうあなたの心情も、む
べなるかな。◀「聖域なき改革」
と「美しい国・日本」という大言
壮語とペテンの下に、労働者
派遣法、障がい者自立支援法、
など悪法が次々と生み出され、教育
基本法は改悪されました。沖縄の
普天間基地を返すと宣うて、何年経ち
ますか? 民主党の裏切りをばさんで、
この国の、この7年間、約束は何一つ
果たされていないのです。◀雪がとけて、
雪辱の季節を待ちわびる春です。(ハギ)

今年もやります！「みちのくTRAY」

復興計画には障がい者の視点を！

自立生活 夢宙センター 岡前美保子

しんどい時は、声をかけ合って頑張った



私が参加した理由は、「被災地障がい者センターみやこ」で働く黒柳直美さんが、昨年5月に夢宙センターに来られ、誘われたからです。黒柳さんから被災当時の様子や仮設での暮らし、さらに東北の障がい者の状況を聞いていたうちに、「この目で現実を受けとめたい。大阪の私にもできることがあるかもしれない」と思うようになりました。

昨年8月、岩手県の三陸沿岸を宮古から陸前高田まで、約150kmを車いすで縦断するという「みちのくTRAY」が行われました。このプロジェクトの目的は、①犠牲者への追悼、②復興に向けた街づくりに向けて、障がい者の視点を各市町村へ伝えていく、③プロジェクトを通して当事者や支援者を集め、東北の障がい当事者活動の活性化に繋げていくこと、でした。

「みちのくTRAY」は、東北大震災を受け、復興計画が動き出すタイミングで、障がい者の視点をに入れて、誰もが住みやすい街づくりを提言していくという趣旨で行われました。都合に合わせていつでも合流し、離脱できる形式ですが、全国から集まった障がい当事者や支援・介助者は、総勢200名常に30〜50人が車いすを先頭に歩き、4台の自動車サポートと体調管理のために並走しました。

このイベントに、大阪・夢宙センター（住之江区）から8名が参加、全員完走しました。大阪から参加した岡前美保子さん（46才）と事務局の八幡隆司さん（ゆめ風基金理事）に話を聞きました。（文責・編集部）

夢宙センターが一丸となり、7月に大阪で募金活動を始めました。天下茶屋駅（西成区）で週3回、1カ月間、「みちのくTRAY」の宣伝をし、募金を呼びかけました。小学生や中学生もお小遣いのなかから募金に協力してくれました。合計38万円の募金額は、私の経験では最高額です。被災地への共感が大きいことを

実感できました。旅のスタートは、宮古市田老町でした。ここは、大きな津波が押し寄せた場所で、たくさんさんの遺体が見つかった場所です。全員で黙祷を捧げ、気を引き締めて出発しました。全行程150kmを12日間で走破する計画だったので、1日10km以上歩きます。三陸海岸は、アップダウンが激しい起伏に富んだ地形が続く、電動車いすでも、数人のボランティアが押さないといけないほどの急な登り坂もありました。宿泊先や休憩地は、避難所になった公民館・体育館などを

「当事者がしっかりと自己主張していこう」と語りかけていました。全体の行動も、地元の当事者がリーダーとなり、休憩場所や歩くペースを決めていくという変化がありました。わずか10日間あまりでしたが、当事者の主体性が生まれたと思います。地元障がい者が、生まれて初めて知らない人の介助を受けながら移動し、行政交渉したことは、カルチャーショックだったようです。「やったらで

きる」という自信もでき、「それなら、こんなこともやってみたい」という意欲も生まれました。こうして1日だけ参加予定だった障がい者が、2泊3泊と参加日数を伸ばしたり、一度帰った参加者が再参加することもありました。地元新聞に掲載されたこともあって、現地での注目度は高いものがありました。車いすで歩く姿に声援を送ってくれた人はたくさんいます。「保護される障がい者」から「主体的に動く障がい者」へのイメージ転換という、市民啓発の成果は、大きかったと思います。今年も「みちのくTRAY」をやります。7月末〜8月上旬に、今回は、南から北上するルートを用意しています。岩手県内の障がい者が準備段階から中心となって、沿岸部の当事者が主体となる企画にしようと話合っています。

当事者の行動が社会を変える

ゆめ風基金理事 八幡隆司

辛い状況が続く被災地

入部香代子

元気を与え合う関係を

私が、岡前美保子さんに初めて会ったのが、この取材でした。「元気な人だな」と思い、お話を聞き始めました。お話を聞くにつれて「すごい！」と感動しました。「みちのくTRY」の準備や困難な道のりを聞き、「私ならどうするだろう？」と考えながら耳を傾けました。



岡前さんは、被災地のことを深く考え「車いす三陸横断」への参加を決めたので、介護者を自分で探し、大阪でカンパ活動をしながら、さらに一緒に車いすで歩いてくれる人を募ってきたというのですから、またびっくりです。

仕事もしていた私は自分のことで精一杯で、東北まで行くななんて思いつかなかったでしょう。岡前さんは、多くの車いすの仲間たちと支援者たちと共に、被災地の障がい者に少しでも元気を出してもらおうと一生懸命です。

私も阪神大震災を経験しました。豊中(大阪府)で1995年1月17日、早朝に襲ってきた「阪神淡路大震災」に直面した私は、寝たまま身動きもできませんでした。家が壊れるし、すぐ隣の部屋では、テレビが飛ぶなど、死ぬほどの恐怖でした。実際その日は、恐怖で外へ出ることもできませんでした。

被災地では、元気を取り戻したように見える人たちも、震災・津波によって自分のまちや家族をなくし、未来も何をどうしたらいいのか？もわからない状態が続いています。また、フラッシュバックといった症状に悩まされる人もいます。

そのような人たちをも内面から元気にしていくのは大変です。長い付き合いが必要でしょう。

障がいのある被災者は、避難もできない中で、どんなふうになくなっていったのでしょうか？ 痛かったです。悔しかったです。残された障がい者も、元気な人に抵抗することもできません。差別をいっぱい受けることになります。その分私たちががんばらなければいけませんね。岡前さんのお話を聞きながら感じました。応援する人もされる人も頑張りましょう。

ゴール近くの陸前高田の沿岸部では、津波で全て流された草だけの地域がありました。ここを通る時に震災当時を思い出して泣き出す宮城のメンバーや余震でパニックになる参加者もみなで困って励ましたりもしました。炎天下のハードな旅でキツイ行程だっただけに、達成感も大きく、参加者相互の繋がりは、今も続いています。みちのくTRYは、東北の障がい者が元気になる源になったと感じています。

利用し、洗濯はコインランドリー利用です。お風呂は銭湯ですが、岩手沿岸部では障がい者が町の銭湯を使うこと自体が初めてで、周囲のお客さんも戸惑いを隠せません。それでも、手助けしたいという気持ちは伝わってきました。

「どこまで歩くの?」「新聞で見たよ」との声が掛かるようになります。復興計画についての行政交渉は、大きな目的の一つです。沿道にある宮古市・大槌町・大船渡市・陸前高田市など各市町村の役場に行き、要望書を手渡し、交渉しました。行政側の対応は様々でしたが、4、5日目に、宿泊先

感動のゴールは、奇跡の一本松



形式的に手渡すだけという場面もあつたからです。経験豊富な大阪メンバーが、「これでは、何のために歩いているのか、わからない。地元の障がい者が自分の手で岩手を変えるお手伝いをしに大阪から来たんだから、地元の障がい者はもっとしっかりして欲しい」との突きつけをしました。

地元障がい者からは、「住み続けるのは私たち。TRYの時代だけ波風立てられても後々困る」との反論が返ってきて、大阪のメンバーは、「じゃあ、何のために私たちはここまで来たのか?」「変える気はあるのか!」との応酬となりました。

こうして、今後のまちづくりや行政交渉の意味について率直な議論が深まり、「今がしんどいからこそ、頑張りつて変えていこう!」と共感することができました。これを機に雰囲気が一変しました。みんなの呼吸もぴったり合い、お互いの声かけや沿道の人たちへのアピールなど、声を出しながら歩くようになりました。長いトンネルなど危険を伴うところもありましたが、歩くしんどさもカバールできるよ